

月の満ち欠け —— クッカルトの『図書館司書』——⁽¹⁾

布 川 恭 子

1. はじめに

ユーディット・クッカルト Judith Kuckart⁽²⁾は、ヴェストファーレンのシュヴェルムで1959年に生まれた。ベルリンで演劇と文学を学び、ダンスの活動経歴を持つ彼女の、1998年に公刊された小説『図書館司書』"Der Bibliothekar"⁽³⁾は、一読する限り、あらずじや登場人物設定ともに、きわめて明快かつ陳腐な物語のようにみえる。

舞台は1982年のベルリン。大学図書館で司書長を勤める、53歳の主人公ハンス=ウルリヒ・コルベ。彼はプロテスタントの牧師の息子で、大学では神学と文学を修めている。離婚して一人暮し。三人の女性との間にそれぞれ三人の娘がおり、長女リオバは28歳、次女ゾフィーは14歳、末娘エドナは2歳。

彼は、サボテンと、本と、もはや存在しない本の収集家だ。「もはや存在しない本」とは、「いかなる場所も必要としない」(27/S.224)といわれるように、存在していたという過去のみが存在する完結した存在、つまり非在であって、

(1) 本論は、第32回ドイツ現代文学ゼミナール(1998年8月25日)での口頭発表を、大幅に加筆訂正したものである。

(2) 彼女は、1990年公刊の『武器の選択』(Judith Kuckart: *Wahl der Waffen*. S. Fischer Verlag, 1990.)によって、1991年オーストリアのラウリスの文学賞を受賞している。受賞理由は、70年代のテロリズムの背景にある政治状況を、中傷も弁解もせずに文学として結実させたというものだ。1994年には小説『美しい女』(Judith Kuckart: *Die Schöne Frau*. S. Fischer Verlag, 1994.)を発表している。

(3) Judith Kuckart: *Der Bibliothekar*. Frankfurt a.M., Gatzka bei Eichborn, 1998. 総255頁, 全36章。以下作品からの引用は、引用末尾に章数および頁数のみを付す。章数は、ハンス=ウルリヒ・コルベの物語29章についてはアラビア数字で、その合間に挿入されているゾフィーの物語7章については丸付きのアラビア数字であらわす。また〔 〕内は論者による補いを、[...]はテキストの中略をあらわすものとする。

現実に書架の一角を占めることはない。

もはや存在しないことほど、確実なことがあり得るだろうか？
(12/S.89)

ここに、彼のありかたが端的にあらわれているといえる。彼は自分の周囲に、現実に存在する本のみならず「もはや存在しない本」によって、物理的にも精神的にも壁を築き、本という城の中でサボテンとともに暮らしているわけだ。

現実の世界で挫折していく文学の先例たちをよく知っているはずの彼は、それにもかかわらず、この安全な虚構の城から出て、現実の生の只中へと踏み出そうとする。

ハンス=ウルリヒ・コルベは本をばたんと閉じ、腕に淡色のマントをつかみとり、ジャケットのポケットに市街地図をつっこんだ。
(1/S.7)

ここから、この小説ははじまることになる。そこで彼は、ある娼婦と出会い、惚れ込み、翻弄され、終局は相手を殺してしまうこととなる。彼の宿命の女ともいえる、左手の甲に獣の刺青を持つイエレーナは——本名はエリーザベト・シュネー——28歳、ピープ・ショウのヌード・ダンサーである。

ハンス=ウルリヒ・コルベはこの物語のなかで、文学の先例たちのパロディーを演じているに過ぎないという印象を与えなくもない。たとえば、彼はイエレーナと出会って間もないある土曜日の、誰もいない図書館で彼女に向けてのリハーサルを行っているが、そこではこのように述べられる。

ハンスは、ここに誰も居ない限り、イエレーナを彼の生のうちに密かに連れ込もうとした。小説におけるような出会い、イエレーナは彼にそう思われた。(10/S.55)

このとき彼は「トーマス・マンの最新版」を前にしているが、ヴェニスに向かうこと、職を放棄して身を持ち崩していくことも含めて、これからハンス=

ウルリヒ・コルベが物語りのなかで演じていくのは、トーマス・マンの登場人物のかりかちゅうなのだど露骨にあらわされているかにみえる。『図書館司書』の随所に、マンに関する記述が散見されるが、実際かなりパロディ的な要素の濃厚な小説だといえる。

ちなみに書評では、この『図書館司書』はバナーलすれすれのところで、だがそこに陥ることなくきわどいバランスを保っている、近年稀にみる優れた小説であると好意的だ。しかし、どこがどのように優れているのかは判然と評されているわけではない。「フライターク」⁽⁴⁾では、ハンス=ウルリヒ・コルベの名前がすべてハンス=ウルリヒ・クローゼとなっているのは誤植だとしても、⁽⁵⁾この小説においてはハンス=ウルリヒ・コルベの物語についての鍵ともなる次女ゾフィーが末娘となっており、なおかつ年齢も間違っていたりする。また「ツァイト」⁽⁶⁾でも、ゾフィーがハンスの長女となっていたりと信憑性に欠ける。比較的まともなのは「ヴェルト」⁽⁷⁾の書評だ。しかし、これほど男性の心情を精密に的を得て描く女性作家はいないという作者クックルトに対する評に、これは男性的な小説だとする評に、本論は異議をとない。つまり、この『図書館司書』という小説は、男性的というよりは、きわめて女性的であると、それどころか女性そのものともいえるものが基底に流れていると、本論は考えるからだ。以下より、これについて考察をすすめていきたい。

2. 構成

『図書館司書』には、二つの時間が同時に流れている。1982年の「4月の最終土曜日」(1/S.7)から夏を経て秋に入った「9月30日日曜日」(35/S.246)までのハンス=ウルリヒ・コルベの時間と、その12年後の1994年の3日間ほどの、彼の次女ゾフィーの時間だ。数字による章付けはされていないが、ここで整理

(4) Werner Jung: Der Bibliothekar liest nicht mehr — Hemmungsloser Liebesroman (FREITAG, 20.5.1998)

(5) これは実在する、同性同名のハンス=ウルリヒ・クローゼというSPD議員団のプレジデントの名前に故意にか、もしくは偶然に引きずられた所以かもしれない。

(6) Reinhard Baumgart: Wilde, dunkle Reise — Judith Kuckart erzählt eine unmögliche Liebe (DIE ZEIT, 26.5.1998)

(7) Elmar Krekeler: Sex ist etwas, das man dem anderen antut — Judith Kuckart folgt einem Bibliothekar durch seinen Lebenswahn (DIE WELT, 30.5.1998)

するために章付けをすると、この二つは合わせて36章になっている。このうち29章という大部分が1982年のハンス=ウルリヒ・コルベの物語に費やされており、そのなかに断片的かつ唐突に7章の1994年のゾフィーの物語が挿入されている。

舞台はどちらもベルリン、それもおもにペンジオーン・フロリアンの10号室だ。ここでは、1982年にハンス=ウルリヒ・コルベがイエレーナと夜をともにするために、そして後半では彼女とともに住むために借りた部屋、最終的にはそこでイエレーナが死を迎える部屋となる。当時14歳で東ベルリンのパンコウに母親とともに住んでいたゾフィー、ハンスの一番のお気に入りの娘だったといわれるゾフィーは、1994年の時点で26歳、ダンサーを志している。父親の、彼女にとっては不可解な「父親の事件」(③/S. 51)のために、彼女は自分の時間が12年前の14歳から止まってしまっていると感じている。

なぜわたしは14歳のときから、もう成長しないのかしら。(③/S.50)

そしてベルリンの壁崩壊後も、彼女は自らのうちに壁の存在を感じ続けている。そこで彼女は行方不明の父親を探すために、この事件と決着をつけるためにベルリンにやって来る。そしてこの部屋に滞在し、この事件を12年前に扱った刑事アーベンシュタインのもとに赴いた彼女は、彼に「シュネー殺人事件」(①/S. 21)の現場検証の際の写真や、調書をみせてもらう。

彼女が聞くことを欲している物語ではもちろんないものが、みえてくるだろう。(①/S.19)

つまりこの小説は逆に、ゾフィーの父親探しの物語の記述のなかに、父親ハンス=ウルリヒ・コルベの物語が挿入されているとも換言することができよう。

この構成は、著者ユーディット・クッカルトの1990年に発表された小説『武器の選択』とも共通するものを持っている。⁸⁾ この物語は、主人公のジャーナリストを目指してパリでアルバイトをしていたカーティアが、かつて自分のベビーシッターだったテロリストのイエッテの死亡記事を目にとめるところから

はじまる。この小説の基本的な構成については、邦訳者中島氏が、あとがきで以下に述べているとおりだ。「カーティアのイエッテ探しの旅についての記述の中に、イエッテの物語とそしてカーティア自身についての物語が、なんの前置きもなしに、ただ段落の切れ目によって交代し、場合によっては完全に混交されて語られるというものである。」⁸⁾ ちなみに『図書館司書』は、ばらばらと断片的に出来事が順序を前後して語られるため、読者にかかなりの忍耐を要求する小説であることは否めないだろうが、ハンス＝ウルリヒ・コルベの物語とゾフィーの物語が混合されて語られることはない。

だが両作品はまた構成のみならず、内容にも共通するものを持っているといえる。一読すると極端なまでに『図書館司書』は非政治的であり、対して『武器の選択』は政治的だ。しかし、内実はどちらも私的な要素を持ち、断片的である。カーティアは、マスメディア等が切り捨てたイエッテ個人の物語を、当時の彼女を知っている人々をまわって、ときには死人さえも呼び出しながら、なんとか拾い上げていこうとする。なにかに一つの理路をつけようとする、それに見合わないものは切り捨てられざるを得ない。またすべてを捉えようとする散漫で断片的なものにならざるを得ないのだ。『図書館司書』にはアルノ・シュミットの名前が何度も登場するが、この理由は——パロディ的な要素もあるだろうが——、シュミットが、客観的かつ全体的に事物を把握することは今日では不可能だとして、不連続で断片的様式を持つ作品を著していったことにあるといえるのではないか。たとえば、シュミットの作品はこのように評されている。「こうした〔シュミットの〕作品群にはもはや伝統的な意味での小説という形容はほとんど不可能で、その開かれた、〈穴だらけの〉網の目構造から見て、多声的な楽譜とでもいうのが最も適切であろう。つまり、楽譜として提出されて、読者は自分自身のファンタジーによる労働によってテキスト

(8) クッカルトの『美しい女』もまた同様の構成を持つが、これを中島氏は「新しい印象主義」として、以下のようにその性格を整理している。1) プロットの切断・2) 出来事描写の散在性と間接性、心的描写・3) 心象風景、身体感覚的表現・4) パセージとその交替、記憶の動員・5) キー・ワード、キー・イメージのくり返しと意味深化(参照: 中島裕昭: J.クッカルトの〈レーベンスボルン〉小説『美しい女』について——歴史をとらえる新しい印象主義——『東京学芸大学紀要』第2部門「人文科学」第50集、1999年、107-118頁)。

(9) ユーディット・クッカルト著『カーティアの選択』、中島裕昭訳、三修社、1997年、252頁。

のすきまを満たすことを要求されるのである。¹⁰⁾ クッカルトの著作を前にする読者もまた、この『図書館司書』が呈する楽譜を読み解き、それが奏でる音楽を聴き取らねばならないだろう。

カーティアと同様に、ゾフィーは実際に起こったことの背景、それに至った背景を探していく。彼女にとってはただの情痴事件としてレッテルを貼り、ファイルしてしまえば済むというものではない。だがカーティアが、イエッテの死を認め、自分の武器を選択すること、すなわち「書く」という行為をはじめようとするところで物語が終わるのに対して、ゾフィーは曖昧模糊とした問題を抱えたままに終わるかにみえる。「だれが、わたしに父の物語を、物語ってくれるのかしら」(①/S.22)ゾフィーの1章はこのようにはじまる。だが彼女の最終7章で、彼女が得たのは「難問のみ」(⑦/S.255)だとされて終わる。ゾフィーはこの後どうなるのか、これを考えるために、1982年の彼女の父親ハンス＝ウルリヒ・コルベの物語に向かうことにしよう。

3. 分析

1982年の社会情勢はというと、1981年末のポーランドでの厳戒令に伴ない、東西ドイツの緊張も高まっていた頃だ。政治の面では、シュミットが首相を辞任し後任がコールとなり、また緑の党が進出しはじめた年でもある。エイズが「エイズ」という名前を与えられて社会的に認識されるのも1982年。フェミニズムやエコロジーといったテーマが問題となりはじめた時期でもある¹¹⁾。

ところで、『図書館司書』は1982年という年を前面に押し出しているにしては、このような政治的・社会的な事件等については——作者クッカルトのほかの著作がきわめて政治的要素を持つことを鑑みても——奇妙なほど触れられていない。だが、実際の1982年ベルリン発の記事に興味深いものがあつたので、

10) ヤン・ベルク、他著『ドイツ文学の社会史』(下) 山本尤、三島憲一、保坂一夫、鈴木直訳、法政大学出版局、1989年、1224頁。

11) また1982年にドイツの書店でベストセラーとなっていたのはミヒャエル・エンデの『はてしない物語』、『モモ』やウンベルト・エーコの『バラの名前』など。映画では『E.T.』が記憶に新しいかもしれない。トーマス・マンの『魔の山』が映画化されている年でもある。文学では、たとえばクリストフ・ハインの『疎遠な情人』や、ベーター・シュナイダーの『壁を跳ぶ男』などが公刊されている。

12) 参照、Chronik 1982. Tag für Tag in Wort und Bild. (Chronik Verlag, Dortmund, 1993) S.27

触れてみることにする。⁰³ それは、西ドイツ連邦行政裁判所が新しいピープ・ショウの設立を今後一切認めないという判決を下した、というものだ。この判決はある人物がドルトムントにこれを設立し営業しようとしてドルトムント市と争議していた裁判に対するものだが、その理由はピープ・ショウは公序良俗に反しており人間の尊厳を損なうものだから、というものである。ドイツではピープ・ショウは1976年から存在するものだが、こういった判決や決定によりピープ・ショウに関して相当な物議が1982年には引き起こされている。この記事は、なぜこの『図書館司書』が1982年という設定になっているのかということについての、一つのヒントになるものかもしれない。『図書館司書』は舞台をベルリンとし、主人公の相手役イエレーナはドルトムント出身で、ピープ・ショウのダンサーをしているという設定になっているからだ。こういったことから、作者が1982年という年を参照し、なおかつ暗に、かなりパロディ的に援用していることがわかる。

では、作品中の1982年を、実際の1982年に関して対応させてみよう。⁰⁴

冒頭で登場するパリのクレイジー・ホース(1/S. 7)は実在していて、現在も営業中だ。ちなみに『図書館司書』のなかで、ハンス=ウルリヒ・コルベがこのナイト・クラブに電話する際の電話番号は、現在1999年の時点でも通じる。またここのホーム・ページをインターネットで参照したところ、作中でいわれている450フランといった入場料金等も1999年のものであることが判明した。⁰⁴ そして作中で30年前にアラン・ベルナルダンという人物がこのショウ・ビジネスを創始したのだとあるが、これも事実と対応している。実際にアラン・ベルナルダンは1950年代にクレイジー・ホースを設立し、1954年に照明の明暗と音楽によってショウの女性をきわめて効果的に演出することを思いつ

03) 作中で1956年および57年に、10番のフォワードであるアルフレート・ニエピクロ属するドルトムントのサッカーチームが優勝(15/ S.85)とあるが、これも実際の年やその経過等と対応している。だが、本来ならNiepiekloのところ、『図書館司書』ではNiepikloと、ニエピクロの綴りが違っている。これは作中でイエレーナがこのニエピクロの姪という設定になっているため変えられたと考えられる。参照。Chronik 1956. Tag für Tag in Wort und Bild. (Chronik Verlag, Dortmund, 1990) S.109, Chronik 1957. Tag für Tag in Wort und Bild. (Chronik Verlag, Dortmund, 1986) S. 111

04) <http://www.crazy-horse.fr/reservation.html> (1999年10月29日現在)

いて、これによって成功したという。ハンス=ウルリヒ・コルベが読んだベルナルダンとショウについて書かれた書物も存在しており、1985年に公刊されている。¹⁵⁾ ほかにも、作中に登場するベルリンのジャングルという店も実在しており、作中でも実際とまったく同じ住所になっている。

またゾフィーの音楽と再三いわれているグローヴァー・ワシントンJr.の「ジャスト・ザ・トゥー・オブ・アス」¹⁶⁾は、作品中では1982年にヒットチャートで1位になった(②/S.42)といわれているが、実際は1980年に発売され1981年に1位となっている。ほかに作中の6月に、「アルノ・シュミットとカルロ・シュミットの3回目の命日がやってきた」(18/ S.97)という記述があるが、実際にアルノ・シュミットの命日は1979年6月6日であってこれに当てはまる。だがカルロ・シュミットに関しては確かに1979年に死んでいるが、命日が12月11日なので、こちらは微妙にずれている。¹⁷⁾

ではこれから『図書館司書』のなかの、全部で29章になっている、ハンス=ウルリヒ・コルベの物語について考察していくことにする。

本論がここで問題としたいのは、なぜハンス=ウルリヒ・コルベの物語は「1982年の4月最終土曜日」からはじまり、「9月30日の日曜日」に終わるのか、である。より具体的には、なぜハンス=ウルリヒ・コルベは4月末の土曜日から日曜日に入った時点でのみ、彼女と出会うことができるのか。またなぜイエレーナ、すなわちエリーザベト・シュネーは9月28日金曜日の夜から、29日土曜日に入った時点でのみ死を迎えることになるのかである。現実の1982年9月30日は木曜日で、また1982年の9月最終日曜日は26日となる。文学作品がわざわざ現実の日付を参照し、かつそれと合致している必要はもちろんない。だがそれゆえに、なぜ作者がその日付にしたのか、なぜ物語はその日付でなければならないのが問題となるのではないか。作者はいまみてきたことからわかる

15) Andre Sallee, Philippe Chauveau: *Music-hall et cafe-concert*. Paris, Bordas, 1985.

16) Grover Washinton, Jr.: *Winelight*. Elektra/ Asylum Records, 1980.

17) ちなみに作中1994年の時点で、バンコウ出身のゾフィーが電話帳でハンス=ウルリヒ・コルベの名前を探しているとき、ウーヴェ・コルベの名が登場するの——ウーヴェ・コルベはバンコウに住む実在するドイツの詩人だ——パロディの一種とみていいだろう。

ように、必ず1982年を参照しているはずだ。そしてまた、この1982年の何月何日が、それも何曜日かということまで、作者は考えたのではないか。

少し整理してみよう。現実の1982年の暦では、4月の最終土曜日は24日になる。だが物語の設定に従って逆に辿っていくならば、1章の4月最終土曜日は4月28日となる。これから、この物語の暦にしたがって考察をすすめていくことにする。ハンス=ウルリヒ・コルベはこの28日、土曜日に本を閉じて現実へと踏み出す。そうして夜の街ベルリンをさ迷うことになる。だが、一軒目の店でも二軒目の店でも、失望のみしか得ることができない。ようやく0時30分を過ぎ、4月29日の日曜日に入った時点でイエレーナは登場する。そして29章で、28日の夜を経て、29日に入ったときのみ、彼女は死ぬことが、設定されていることになる。これはなぜなのか。この理由を本論は、『図書館司書』という作品が29という数字によって支配されているためなのではないか、そしてこれを解く鍵は、作品の基底に流れるバッハの音楽、特にカンタータにあるのではないかと問う。そしてこの問いは、先取りするならば、本論の答えでもある。

まずは、イエレーナをみていくことにする。

28歳のイエレーナは、自分はもう若くはないと感じている。そして自分の「ダンサーとしてのキャリア」(20/S.154)を、2年以内に必ず終えようと考えている。そしてまたこれと同じことを、イエレーナが踊るピープ・ショウのレジ番をしているマロツケ夫人が、以下のように述べている。

彼女、つまりイエレーナは、いつか、でも少なくとも2年のうちに自分の生を変えようと思ってるの。「もし彼女の30の年がやってたら…」ハンスはうなずき、そしてすぐさま話を打ち切った。
(21/S.166)

そしてハンス=ウルリヒ・コルベのもとに現れる、前歯の3本が欠けている、しわくちの顔をした若い男という、作品の中では死神もしくは悪魔ともとれる奇妙な人物も同様に「そう、もうすぐ彼女のキャリアも終わるんですよ」(6/S.47)と、意味深長に述べている。これらは28歳の時点から遅くとも30歳までにイエレーナは死を迎えるという予言ともとれるだろう。またこれは、28日

の夜から、29日に入って死を迎え、30日に発見されることと呼応しているともみれるかもしれない。だがこれだけでは、29という数字の意味を理解したことにはならない。

次に、「肉体から読書をもぎ取って」(1/S.10)現実の生の只中へと我が身を投じることを決心する、ハンス=ウルリヒ・コルベについて考察していこう。だがこの生の只中とは、そもそも本当に現実の世界だったのだろうか。つまりハンス=ウルリヒ・コルベの物語は、表面的には出会いから別れへと一貫した流れを持っているようだが、その裏で、流れの前半と後半との間には断絶があるのではないか。前半では本の世界すなわち虚構から現実へと、そして後半では現実から虚構へと、ベクトルがまったく逆向きになっているのではないかと、本論は考える。ここで鍵となるのは、バッハの音楽だ。¹⁸

それでは、この前半と後半についてみていくことにする。

前半は、彼とイエレーナとの出会い。これに続く昂揚感によって、それまで14年間ゾフィーのためだけにあった木曜日を、彼はイエレーナと会うためにのみ使うようになる。そして彼の心にバッハのカンタータ34番「おお永遠の炎、おお愛の源よ」が鳴り出すのが4章まで、出会いから約1週間のことだ。

「おお永遠の炎、おお愛の源よ」と、彼の心は歌った。バッハのカンタータ34番は聖霊降臨祭のものだと、彼は知っていた。これはまた34a番として婚礼用にときおり用いられるのだった。

(5/ S. 29)

そして3週間ほどして彼はペンジオーン・フロリアンの部屋を借り、彼女と定期的に会うようになる。二人の関係が徐々に安定してきたのちに、彼らは諍いを起こし、1週間ほど会わないのが17章まで。ここで、ゾフィーが生まれてからの14年間やめていた煙草を吸い始めるようになる彼は、バッハのカンター

¹⁸ バッハのカンタータについては以下参照。F.スメント、P.ミース著『バッハのカンタータ（バッハ叢書6）』角倉一朗、高野紀子訳、白水社、1980年。角倉一朗編著『バッハ作品総目録（バッハ叢書別巻2）』白水社、1997年。

タ5番「われはいずこに逃れ行くべき」(17/S.108)を想起することになる。

彼は、自分が頭を揺り動かしてハミングしていることに突然気づいた。「われはいずこに逃れ行くべき」を、バッハのカンタータ5番を、彼はハミングしていたのだった。(17/S.108)

そして失意のまま一人でチュービンゲンに向かった彼が、ふたたびベルリンに戻ってくるまでが20章、7月の前半。その後、イエレーナ不在の3週間があり、そこで彼はまたもやバッハのカンタータ12番「泣き、嘆き、憂い、怯え」(21/S.168)を聴き——このカンタータ12番については後述する——、その日からもはや決して図書館に行かなくなる、職を放棄するまでが21章になる。

後半は、この3週間の不在後のイエレーナのふたたびの登場と、また比較的安定した3週間が続く24章が、8月の中旬まで。それから約1週間ほど二人でヴェニスに旅行をして、帰って来るまでが25章、9月の初めまでのこと。その後は、彼が刺青をし、本を売り払ってベンジオーン・フロリアンに引越しをして、ともにイエレーナと暮らし始めるのが28章まで。それからちょうど1週間のちの最終章、29章に至って破局が訪れることになる。イエレーナは出て行くことを宣言し、二人で1日だけそれを延ばすことになるのが9月28日金曜日の夜となる。夜半を過ぎ、29日に入ったとき、彼はイエレーナに剃刀をあてる。そして9月30日、日曜日の朝に警察が、アーベンシュタイン警部がこの部屋を踏み込むこととなる。

ここで気づかれるのは、前半、ハンスがゾフィーからイエレーナへと移行していくその都度、バッハのカンタータが流れていること、そして後半では逆に沈黙が支配していることではないか。

最終章も奇妙だ。彼はなぜ、彼女の全身の体毛を除去したのか。現場検証をおこなったアーベンシュタイン刑事は、ゾフィーに現場写真をみせながら、このように述べている。

「彼女の恥毛は、剃り落とされていました。」(①/ S.18)

なぜ、その必要があったのか。傷はあっても血は一滴も流れていないといわ

れる彼女の死因はなになのか。彼はなぜ男女の性別を失っているようにみえたという姿になったのか。そして刑事アーベンシュタインに発見されたとき、その肩にはほこりが積もっており、彼は「石」(①/ S.21)になっていたといわれるのはなぜか。現場検証の際にカメラマンが呟いたように、まさに「奇妙」だ。

彼の異性に対する嗜好は、肉体的に、少女から成熟した女との間の微妙な時期に揺れている——つまり少女の肉体に対してアンバランスな胸を持つ——、少女でも女でもない存在にあるといわれる。

彼は、その上半身が胸の大きさにくらべるときわめて華奢な女を好んだ。彼女たちは、少女が彼のために女になろうと急いでいるかにみえたのだ。(7/S.36)

前半で本を閉じ現実へ向かった、このような嗜好を持つ彼は、イエレーナを「完璧」だと感じる。

彼女は少女だった。[...] 彼女の肉体は完璧だ。(5/S.33)

さて、14年前まで彼は本を読む際に熱心にアンダーラインを引いていたといわれているが(27/S.223)、それ以降は本を憎むようにさえなっていたという。

いまや彼は本を憎んでいた、とりわけ生であろうと欲する卑俗な本を。それらは現実に押し付けがましく供すればするほど、それだけ現実を裏切るのだ。(27/S.221)

これ以降の14年間は、ゾフィーによって本を読むという行為を代替していることが、以下からわかる。

ゾフィーの誕生以来、彼はほとんど毎週木曜日に国境を越えて行った。東で過ごすこの木曜日は、彼の生における定期的な冒険だった。ゾフィーは彼のもっともお気に入りの娘で、東ドイツの首都

への週毎の旅に、彼は文学的経験の転移を認めた。ゾフィーに関することは彼にとって、まだ存在しない本だったのだ。(3/S.26)

ゾフィーのもとに毎週木曜日に訪ねていくことは、彼にとっては「冒険」であり「文学的経験」であるとされる。また別の箇所、彼が「わたしは〈本〉を〈女〉で置き換えた」(29/S.242)と述べていることから、ゾフィーが彼にとっては「本」の代替となっていたことは明らかだろう。サポテンと本と「もはや存在しない本」の収集家である彼は、ゾフィーが生まれて以来は、もはや実際に本を読むことはなく、14年間「いまだ存在しない本」というゾフィーを愛してきたわけだ。だがここで、ゾフィーからイエレーナへと、この役割は移行することになる。それゆえまた、この時点でのイエレーナ、完璧なイエレーナは彼の空想の産物の域を出てはいない。

日曜大工をするように、ハンスは自分のイエレーナを空中から鋸で切り出した。その日数たるや、神が世界を創造したときよりも早かった。イエレーナは、彼の両手のもとでセンセーションとなったのだ。(5/S.28)

彼には、彼の頭のなかで彼女が血と肉を持つまで考える自由があった。この方法を、彼は聖書から得ていたのだ。(9/S.69)

さてこれらを翻すならば、当然のことながら、彼女は彼の空想の中でのみ完璧でありえるだけに過ぎない。このパーフェクトな、彼にとっては本の代替物であった、そして少女と女の間位置していたイエレーナはしかし、定期的に会うようになることによって、現実に「血と肉を」——そして「恥毛」を——持った、大人の女となってしまう。14章で彼は、現実の不機嫌なイエレーナ、洗面器に浮かぶ「恥毛」、彼の話しに上の空で「金」を貰って帰ることだけを考えているイエレーナに、耐えられなくなる。(14/S.97,99)つまり本の世界から出て現実に向かったというのは表向きで、内実はイエレーナを自分にとって好ましいイメージで作りに上げていたに過ぎないことが、ここで露呈されるわけだ。

そこで、方向転換が起こる。彼は彼女と離れて、バッハのカンタータ12番を

一人で聴くことになる。このカンタータ12番は教会暦における、復活祭後第3日曜日用のものだ。

目を開けることなしに、彼はレコーダーのボタンをつかんだ。
「泣き、嘆き、憂い、怯え」、アダージョ・アッサイ、バッハのカンタータ12番の第1曲。(21/S.168)

だがこれは、「29分」⁹⁹で終わる。

29分。レコーダーは機械的にカチリと止まった。(21/S.169)

この復活祭後第3日曜日とは、物語の暦ではいつにあたるのか。逆算していくと、実はぴたりと4月29日の日曜日に相当している。つまり、まさに冒頭、1章目にイエレーナと会う日付と一致しているのだ——ちなみに現実の暦に直すと25日になる——。すなわち出会いのとき、すでに音楽は鳴り出していたのだ。だがここで、音楽は止まってしまう。ここに、前半と後半の断絶があり、ここが、転換点となる。「するとこのとき、彼のこれまでの生が、彼と拮抗した。」(21/S.169)

ここで振り出しに、冒頭1章に戻ることになる。後半で、彼はまたはじめの土曜日と同じように彼女を探すことになるのだ。

ふたたび、はじめのときと同じく、土曜日だった。クレイジー・ホースのかわりに、彼はシュテークリッツとシェーネベルクの間、クレイジー・キャット・クラブをみつけた。〔だが〕そこは彼にはあまりにもうるさ過ぎて、彼は長くは留まらなかった。
(20/S.156)

そして不在の後に再登場するイエレーナは、このように描写されている。

99) ちなみにカール・リヒター指揮による(1973年録音)カンタータ12番は、26分37秒となっている。

それ〔イエレーナの登場〕は、すでに一度、彼がバッハを聴いた
幾日か前にあった。〔そのときは音楽の効力によっていたのに対
して〕だがいま彼女は、いかなる音楽の副次的効果もともなっ
ていなかった。(23/S.175)

今回の登場では音楽という副次的な効果なしに、つまり現実からはじまるイエ
レーナは、ここから最終の29章の29日の死へ、もはやこの世には存在しない非
在へ向かうことになる。これはつまり同時に、1章の29日の音楽を伴う完璧
な、「本」的存在へと向かうことでもある。

ここへ至るためには、イニシエーションが必要となる。

刺青は〔…〕通常の生が冒険になるときの、新しい生の門出にあ
る。刺青は加入儀礼なのだ。(③/S.49)

ゾフィーがベルリンの街中で拾い読みするこの『刺青』という本にあるよう
に、彼は刺青をすることになる。彼はイエレーナを我がものとするために、こ
れまでの日常的な生を——ゾフィーのもとに訪れることが「冒険」であり
「文学的経験」であったように——、ふたたび冒険とするために刺青をする。
そして彼が刺青をし終わったまさにそのとき、治療室の隣の部屋からピアノが、
バッハの音楽が聞こえてくることになるのだ。ちなみに『図書館司書』では、
前半にバッハのカンタータが3曲あるだけで、ほかの箇所には、ここ以外にバッ
ハの旋律が流れることはない。

「バッハのインヴェンション」とハンス=ウルリヒは言った。そ
して右手で空中に旋律をつかんだ。(26/S.213)

そしてまさにこの日から、イエレーナは彼から、彼女の肉体と引き換えにし
ていた「金」を決して受け取らなくなる。(26/S.214)この刺青によって彼は彼
女を、血と肉を持つ現実「女」から、ふたたび最初の出会いのときの完璧な
「少女」へと変容させることが可能となるのだ。そして最終章29章で、29日に、
彼は彼女の体毛を剃りはじめる。

悲哀とともに、ふたたび奇跡がやってきた。〔…〕彼は生温い雪を、さらさら音をたてるクリームを、ほおに、あごの上に、彼女のうわくちびるの上のこまかやかなうぶ毛になでつけた。彼女は無言で、くちびるの間には煙草があった。〔…〕煙草が雪のなかの真中で燃えていた。(29/S.249-250)

そして、彼女は非在の存在となっていく。この9月に起こった「シュネー殺人事件」とは、9月に降る雪という現実にはありえないものをあらわしていると考えられるだろう。イエレーナの本名の姓、「シュネー」は、ドイツ語で「雪」を意味している。生温い雪、雪の中で燃えるといった、一方があらわれることにより他方が消えるといった反対の在り方が、ここで同時にあらわされているのは、彼にとってもっとも理想的な「少女」と「女」との間へと移行していく彼女を端的に示しているのではないか。

彼女は、まだ思春期前の、はかなげな少女のようにみえた。〔…〕
ぼくの少女、と彼は言った。(29/S.249)

彼女は彼の手によって、現実から非現実に変えられることになる。前半で、彼が頭の中で創造した、彼の手のうちでセンセーションとしたイエレーナになるのだ。彼女の首に傷はあっても血は一滴も流れることはない。また彼も、男女という性別を失い、「石」に、奇妙なものに、すなわち非現実的なものとなり、物語から姿を消すことになるのだ。

4. おわりに

この物語を支配している29という数字は、月齢に比することができるだろう。月は、28日の周期でめぐっている。この周期で、満ち、そして欠けていく。存在と非在をめぐる月に、『図書館司書』は支配されているとはいえないか。

29日は1日目に相当する。終わりははじまりに、29章は1章に通じていく。29章の最終部で、1章のフラッシュバックのように、ガーベラの花、カリーヴルスト、ハレンゼーをうろつく歯の3本欠けた男等々が記されているのも、このためなのではないか。そしてまた、29章の「土曜日」は、1章の「日曜日」

へと通じていく。バッハのカンタータは、キリストの生涯のできごとを1年を周期として記念する教会暦のために書かれているが、これにとって重要なことは、年の周期ばかりではなく、週の周期である。すなわち、キリストが復活した日である「日曜日」を「主日」として、教会暦は構成されているからだ。29章でイエレーナが殺害されたのは、1章の「完璧」な彼女を復活させるためだったのではないか。

14という数字もここで、意味を持っていると考えられる。14歳とは微妙な時期、月経がはじまったばかりの頃、恥毛がはえはじめる頃でもある。14歳になったゾフィーがハンス=ウルリヒ・コルベの嗜好にそぐわなくなったため、イエレーナに移行したと、そして14章で彼がイエレーナに憤懣を覚えるのは、まさにこの恥毛ゆえだと考えることができるのではないか。また女性の月経において、14日目は排卵期にあたることも考慮すべきだろう。

本論がさきに述べた、この小説は男性的というよりは、きわめて女性的な、それどころか女性そのものともいえるものが基底に流れているのではないかとした理由が、ここにある。そして『図書館司書』は——かなりパロディー的な遊びの要素を含んでもいるが——、その構成および内容において、きわめて綿密に考えられ計算された小説であるということができよう。この小説、この断片的なテキストからなるクッカルトの『図書館司書』は、29という数字を導きとして考察することによって、月の満ち欠けを奏でるのだ。

さて、12年後に26歳という設定で登場するゾフィー——ダンサーとして身を立てていくことを志しているゾフィー——もまた、この数字に支配されるようになるのだろうか。作中で、イエレーナが26歳のときに刺青をした(32/ S. 210)といわれていることをここで考え合わせてみよう。するとこの2年後にゾフィーもまた同じような運命を迎える可能性もなくもない、かもしれない。だが、それはまだ存在していない物語なのだ。